



小島烏水(右) (1873-1948)

ウォルター・ウェストンは、明治38年3月25日、二度目の日本滞在を終え、故国へ向けて出立することになるが、その四日前、横浜で知り合った四人の山友達をオリエント・パレス・ホテルの昼餐に招いている。その四人とは、小島烏水、岡野金次郎、武田久吉、高野鷹蔵であった。

1905年秋、小島烏水ら7人によって日本山岳会が設立され、今年で100年を迎える。10月の記念式典に向け、3回にわたりその草創期の足跡をたどる。1回目は創立当時の人々を、作家の近藤信行氏に執筆してもらった。

100周年を迎えた日本山岳会① 日本山岳会草創のころ

近藤信行



2005年(平成17年)
8月号(No. 723)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

100周年を迎えた日本山岳会①	
日本山岳会草創のころ……	1
100周年記念シンポジウム	
「日本山岳会のこれからを考える」第1回……	4
第33回山岳史懇談会 創立期のアルムクラブ……	6
Climbing & Medicine・47……	7
100周年記念事業 会員募金並びに有志募金の御礼(4)……	8
図書紹介……	9
報告……	10
医療委員会・第25回日本登山医学シンポジウム／三水会・第8回韓国の山支部だより……	12
青森／福井・石川・富山・京都・岐阜／岐阜	
東西南北……	14
2本のピッケル／「内匠ノ景」の珍現象／久しぶりの白山	
会務報告……	16
ルーム日誌……	17
新入会員・会員異動……	17
INFORMATION……	18

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

そこでウェストンは、くりかえし山岳会の設立をすすめた様子である。さらに、もし日本に山岳会が生まれたら、自分を必ず加えるように言いのこし、烏水にスイスの植物学者シュレーターの“Taschenflora des Alpen Wanderers”を与えている。その本は、彼が北岳や鳳凰山に携えていったものであった。

この明治38年の春以降、山岳会発足の動きはまことにあわただしいかぎりである。その主軸となつたのは小島烏水だった。35年の槍ヶ岳登山、同行の友であった岡野金次郎によるウェストンの発見と接触、高頭仁兵衛や日本博物学同志会の面々の横訪訪問、その後の交友などをあげていくと、その機運は徐々にকাশし出されていた。

その準備のため「同志の人々は、何十回となく会合した。恐らく何百通といふ手紙の、やり取りをやつたらう」というほどだ。ことに越後・高頭仁兵衛の財政的援助について、山草学の城数馬(弁護士)は、高頭がいかなる身分の人かと調査に向かっている。彼はその途次、長野市に志村烏嶺を訪ね、高



武田久吉 (1883—1972)

頭が新潟県の大地主であり、貴族院議員の互選資格を持つことから調査の要なしという報告を受けるが、打電して彼の来訪をもとめ、権堂の花房屋で三者の会談をおこなった。その結果、高頭は山岳会の会計に欠損ある場合、向こう十カ年間、毎年千円(当時の会費千人分)を提供する、ただし十年たつて自立できなければ解散すること、万一の場合を考慮し、ただちに山岳会のために、養老保険一万円に加入する、との確約が成立することになる。

烏水も横浜・東京間をしばしば往復し、関係各所に連絡をとり、知人を訪ねては入会勧誘をおこなっている。

明治38年10月14日、日本博物学同志会の第十三回例会が開かれて

いる。集まったのは市河三喜、小谷国次郎、河田黙、高野鷹蔵、田中健太郎、田中五一、武田久吉、内田清之助、梅沢親光、福田卓、北沢基幸、岸田松若の十二名であった。その席上、高野は塔ヶ岳採集登山の報告をおこなったが、散会后、その高野と武田、梅沢、河田の四人は、飯田河岸の富士見楼で、小島、城、高頭と合流、山岳会設立について話し合った。運営の実務、財政的な面について、会員獲得と宣伝、「山岳」刊行のことなど、最終的な打ち合わせがおこなわれた。

この日のことは、『博物之友』二十九号(明治38年11月)に読むことができる。高野の報告については、「此ノ旅行ノ詳細ナル紀行ハ山岳会発行ノ『山岳』第一号二現ハルベシ」とあり、会報欄には「支会の設立」という見出しで「山岳」及び山岳ニ関係スル一切ノ事ヲ研究スル目的ヲ以テ本会ニ『山岳会』ト称スル一支会設立サレタリ」と書かれている。

つづいて烏水によって「山岳会設立の主旨書」が書きおこされ、各方面に配られたが、『文庫』『新潮』『新声』の後身『明星』など



高頭仁兵衛 (1877—1958)

には、つぎの勧誘記事を読むことができる。

今回法学士城数馬、「博物之友」記者武田久吉、「日本山嶽志」著者高頭式、その他の同好諸氏と相諮り、欧羅巴アルプス倶楽部の例にならひて、山岳会なるものを組織し、山岳を文学、芸術、科学等の諸方面より研究せんがため、本会の機関雑誌「山岳」を、毎年三回発行して、汎く同好者に頒たんとす、入会御希望の方には、規則書を呈すべきに就き、左記の拙宅宛に御申込を乞ふ。

横浜市西戸部町山王山八百九十八番地

小島烏水

ウェストンの招宴からわずか一年たらずのうちに、このような経

過をたどるのだが、そこには、山と自然、学問と芸術にめざめた若ものたちの意気軒昂たる姿をみることができる。日露戦の末期から日露講和の時期を背景に、未知なるもの、美しきものへの探索が深められるのである。

「凡そ山岳が、一国の地文及び人文に、影響することの大なるは、今俄に説を要せず」とはじまる「山岳会設立の主旨書」は、「夫れ高山に登るは、即ち天に近づくなり」と述べながら、力づよい響きをこめて山岳愛好家にうったえる。

山は実に不朽の寿を有する理想的巨人なり、天火を以て鑄られたる儀表的銅像なり、全国民の重鎮として立てられたる天然の柱石なり、之を謠ひ、之を究むるは、永世の大業にして、且つ何ぞ今日不急の事と謂はむ、(中略)為すべきこと極めて多くして、未だ一も其緒に就きたるはあらず、之を大成するは、一に興味嗜好を同じうする、諸君子の援護に待つ他はある可らず、蓋し是れ実に国民的事業にして、決して少数人士の能く為し得るところにあらざればな



右上から下に、梅沢親光、河田黙、高野鷹蔵、城数馬

り、……

アルパイン・クラブのひそみにならったとはいえ、山に関する研究、山岳趣味の啓発に寄与しようという根本方針を打出したことは、新しい時代の到来を告げるものであった。

はじめ博物学同志会の「一支会」として発足した山岳会も、みるみるうちに着実な歩みをみせた。後年、武田久吉は、庇を貸して母屋をとられたようなもの、と冗談まじりに、ユーモラスに語っていたことがあったが、それも志を同じくするものの結集があったればこそ、である。

山岳会成立の報は、各界で反響をよんだ。ことに地理・地質学、博物学関係の学者の入会があいついでいる。志賀重昂、神保小虎、山崎直方、小川琢治、田中阿歌麿、佐藤伝蔵、白井先太郎らは特別会員（年会費三円）として参加。彼らは『山岳』への寄稿、講演などに協力を惜しまなかった。

そのほか、文学・美術関係者をはじめ多彩な顔ぶれがあつまって、会員は初年度において四百名をこぞえた。『山岳』第二年第一号（明治40年3月）の付録として出された会員名簿を見ると、四百十八名の記載があつて、学者や山好きの青年にまじって多くの文学関係者、ジャーナリストも名をつらねている。小山内薫、柳田国男、前田曙山、畔柳芥舟、山崎紫紅、滝沢秋暁、真下飛泉、伊良子清白、田山花袋、長谷川天溪、伊藤銀月、河井醉茗、正岡芸陽、久保天随、島崎藤村、神津猛らの名がある。

鳥水は「文学会にあらずして、かくの如く、多くの詩人文士を網羅した会の、他にあるを知らず、是れ本会の栄とすることなり」と書いた。



1912年、神田一ツ橋でウェストン講演会が開かれた。写真はそのとき設けられた、ウェストンを囲む宴の様子。右から中村清太郎、三枝威之介、辻本満丸、加賀正太郎、2人おいて小島鳥水、ウェストン、1人おいてフランシス夫人、1人おいて岡野金次郎、1人おいて辻村伊助、鳥山倂成、高頭仁兵衛（『小島鳥水全集』第八巻より）

100周年記念シンポジウム

「日本山岳会のこれからを考える」第1回

山田 新

シンポジウムは100周年記念事業の一環として、記念フォーラム委員会主催により、7月22日に東京体育館会議室で開かれた。日本山岳会(JAC)が主催した幾多のヒマラヤ登山を検証しながら、会員の減少と高齢化という、抜き差しならぬ問題を抱えるクラブが、次の一世に光明を見出す手がかりを探った。

レジュメのサブタイトルに「1970年以降のヒマラヤ登山の果たした役割」とある。ネパールの登山禁止が解けた70年以降、80年代にかけて、ヒマラヤ登山はバリエーション・ルート、縦走、無酸素、冬季と様々な高い目標を追求した「鉄の時代」である。この時期は、70年エヴェレスト隊を皮切りに、JACのヒマラヤ登山が最も活発であり、多くの若い登山者を引きつけ、育て上げてきた。それが同時に、JACに活気をもた

らしていたといえるだろう。シンポジウムには、その時代を振り返り、活性化のヒントを得ようとの狙いが込められていたようだ。

基調講演Ⅰは、70年エヴェレスト隊に隊員として参加し、76年ナンド・デヴィ縦走、84年カンチェンジュンガ縦走両登山隊を率いた鹿野勝彦さんが担当した。自らの体験を通じてJACのヒマラヤ登山を、組織のありかたとその変化という視点で次のように分析した。

JACは56年にマナスル登頂を果たし、ヒマラヤ黄金時代の8000峰初登頂競争に参画できた。当時の日本を代表する山のクラブ(グループ)をつくること自体に意味のある共同体的社会IIゲマインシャフト)によるプロジェクト(特定の目的追求型グループIIゲゼルシャフト)であり、組織の総力をあげて隊を派遣した成果だ。

名門大学山岳部出身者がその中

心を担って登り、帰国後はそのままJACの運営を担う役割を果たした。もともとクラブのメンバーだった人たちが、クラブライフの多面的なゲマインシャフト的性格を維持するうえで貢献してきた。クラブとプロジェクトが自然な形で共存できた時代である。

南西壁からの登頂を目標に掲げた70年エヴェレスト隊は、登攀力増強のため、従来の大学山岳部出身者に加え社会人山岳会の人材を迎えた点で画期的だった。多くの隊員がエヴェレストに登るために入会した。鹿野さん自身も、この隊に参加するために入会した。

ナンド・デヴィでは、隊長の鹿野さんが、帰ったらJACをやめてもいいから、と勧誘した隊員もいたという。個人の目的追求のためにJACを利用する形がここにはある。実際、その後、各登山の終了後、JACとは疎遠になる隊員が多かった。その中からこの日、司会を務めた重廣恒夫さんのように、クラブ運営の要職を担う人も出てきているが、大勢は、年を追って、登山隊の成果から、クラブ運営へのフィードバックがスムーズに進まなくなった。

この時期の社会的背景として、高度経済成長の過程で、登山の大衆化が進んだことがあげられる。情報の入手は容易になり、個人の用意できる資金でヒマラヤに行けるようになった。大学山岳部に入らなくても、ヒマラヤに行けるようになったのである。一方で、JACを中心になって下支えしてきた大学山岳部が縮小し、実力的にも低下した。「きつい」「汚い」「危険」の3Kスポーツとして、若者の登山離れが始まったともいえる。90年代に入ると、公募登山が一般化し、エヴェレストにまでそれが広がった。かつての登山は緊密な人間関係に支えられていたのだが、それなしでヒマラヤに登れるようになり、プロジェクトの性格そのものが変わってしまった。

鹿野さんは最後に「何らかの形でプロジェクトから組織への還元を考えなければならぬ。しかし、現状分析はできても、プロジェクトのありかたを提案すらできないのが実態だ」と述べた。

基調講演Ⅱでは、やはり数多くの登山隊をヒマラヤに送り出してきた日本ヒマラヤ協会(HAJ)

の理事長で、「登山界のご意見番」として知られる山森欣一さんが、JAC派遣登山隊のヒマラヤ登山を検証した。

その中で、若者が離れていく要因として、JACの登山隊は隊の解散後、その経験が継承されていないことをあげた。さらに教本をつくり、研究会を開くといった、一般登山者への啓蒙活動がなかったことも指摘した。研究会を開けば、人は集まったはずだという。ただし、HAJもかつて毎年3つの研究会を開いていたのが、人の集まりが悪くなり、1つにまとめるを得なくなったそう。

山森さんが肯定的な評価を下したのは、JACの海外登山基金だった。早々とこの制度をつくり、名もない高峰登山隊に弾みをつける道を開いたのは素晴らしいことだ、とした。

パネルディスカッションには鹿野、山森の2氏に加えて和田城志さん、山本宗彦さん、熊崎和宏さんの計5人が参加した。山森さん以外は、いずれもJACのヒマラヤ登山隊で活躍した。それぞれがJACとの関わりや現状の打開策

を語った。

和田 84年カンチエンジュンガ縦走に参加した。プロジェクトにひかれて入った典型的な例だと思う。その後、魅力を感じる計画はなく、JACの集まりにも出たことがない。組織への愛着は出身大学(大阪市大山岳部)にある。リタイアした人間が若者について論議するのはどんなものか。クラブの幹部が組織を運営し、自ら登り、書けばいい。シェルパを介護者としてバリアフリーのヒマラヤ登山ができる。ハイキングではない登り方で、夢は若い人に求めず、自分自身に求める。それを若い人が見習うのではないか。

山本 和田さん以上にプロジェクトにひかれたと思う。面白い体験をした82年のボゴダ以来、JACの登山隊に5回参加し、随分お世話になったという気持ちがある。やれることがあるのかな、と思う。夢としてはヒマルチュリからマナスルへの縦走。

熊崎 85年の中国・祁連山脈の計画に一も二もなく飛びついたのが入会のきっかけ。私にとってヒマラヤはJACのような組織を利用しないと行けるところではな

った。クラブとプロジェクトを同時に成立させるのは難しいという話があったが、私の場合は30代前半からJAC理事となり、会運営にも携わって、それも面白いと感じた。少数でも青年部に集まる若者たちが求めるものをくみ取れば、何を若者に提供できるか、ヒントはあると思う。縦、横のつながりを同時に経験できるのは、JACならではだ。

山森 世界の潮流はアルパインスタイルだ。だが、悪天候に弱いという最大の弱点に耳をふさいではいけない。日本人は大きな課題に徒党を組み、残置もするといっ



活発にディスカッションするパネリストの面々
左から司会の重廣、鹿野、山森、和田、山本、熊崎。

た、世界では否定されている方法で取り組んできた。昨年ジャヌー北壁とエベレスト北壁を直登した2隊のロシア人を今年2月、日本に呼んだ。彼らは極地法を駆使してダイレクトをやった。一人ではできない課題に、徒党を組んで取り組んだロシア・クライマーのような気概をもってほしい。

鹿野 登山に普遍的な目標は持ち得なくなっている。山森さんの話もなるほど、とは思う。人間の体がぎりぎり、どこまで耐えられるか追求する山登りがあってもいいと思うが、JACがアマチュアを前提とするなら、少なくとも自分が予測できる限りで、人の死ぬかもしれないような山登りはしたくない。それ以外では、なるべく幅を広げたい。

シンポジウムは、JACのみならず、日本の登山界を取り巻く厳しい現状を再認識させるものになった。この日の講演者とパネリストらの年齢は40代から60代。来年2月に、若い現役登山者を招いて第2回シンポジウムがある。若者の口から、JACと登山の未来像を聞いてみたい。

第33回山岳史懇談会 創立期のアルムクラブ

図書委員会 岡澤祐吉

3月1日に行なわれた山岳史懇談会は、創立期のアルムクラブをテーマに、芳野満彦氏を迎えた。

敗戦後マナスル初登頂が国威発揚につながり、登山の大衆化が進み、3人寄れば山岳会といわれたような時代に生れた小さな登山クラブ(以降アルムと略記)があった。そのクラブが本会山岳会に招かれたことを、アルム代表だった武内敏夫氏(JAC)は、芳野満彦(元JAC)、平岡誠一郎(JAC)、中村元久、岩堀道男氏らとともに、出席者を前に主催側に感謝していた。

アルムという名前はスピリの小説『ハイジ』に出てくるアルム爺さんからとった。早大山岳部にいた芳野広弥氏(故人)が中心となり、満彦氏やその弟の政司氏が作った。創立は昭和29年ころで、山を征服するのではなく「登山そのものを楽しみ、良かった山を求め

る」をアルムのモットーとし、まったく自由な、若さを謳歌するような雰囲気だった。

最初は友人の集まりだったが、もっと幅広く仲間を集めようということで、そのころの街の山岳会がやっていたように山岳雑誌で新人募集をした。学生が多く、常に40〜50人の会員がいたが、大学山岳部で部員が減少し始めた昭和50年ころ、アルムもメンバーが減って自然消滅した。

広弥氏が早大山岳部で身につけた技術力は高く、他にひけをとるものではなかった、と早大山岳部にいたこともある武内氏は振り返る。山の天気を知るため、気象庁高層気象課の課長だった、大井正一氏(JAC名誉会員)からはラジオの気象通報による天気図の書き方、雲の形や雲量の見方を教えられ、現場での天候判断の講習も受けた。昭和32〜33年頃、山学同

士会の天気図講習会に講師として招かれた者もいた。

アルムの活動は他の社会人山岳部と同じで、レジャーにであった。登山者で混雑するそのころの夜行列車や土合駅の写真は、当時を回想させた。

アルムで定期的に発行されていた『アルム通信』という小冊子には、満彦氏の登攀記など会の活動の様子が毎号載った。武内氏はこの小冊子がなければ山岳史懇談会にも出られなかっただろうと話す。満彦氏はおもしろい話やカットで、読むものを退屈させないよう編集に努めていたそうだ。

満彦氏は席上で、昭和23年冬、旧制中学4年のとき八ヶ岳で友の死に遭い、両足のつま先から甲までを凍傷で失った話に触れた。その出来事のすぐ後、山靴の中を血だらけにしながらか山を歩く満彦氏の姿に感動した、という話を付き添った広弥氏から聞いた事がある。

昭和25年冬から始まった満彦氏の徳沢園の冬季小屋番は、物不足の当時、小屋の窓ガラスが盗難に

あったりしたが、小屋番を募集していたからこれに応募したのだとのこと。満彦氏の山に対する思いは、徳沢園に立ち寄る岳人たちと横のつながりを広めていった。滝谷のグレボン初登攀とともにした大学山岳部の関係者、剣岳チンネ正面壁や前穂正面壁の積雪期初登攀などをともにした社会人山岳会とのつながりも深めている。

満彦氏の山への積極的な姿勢は、クラブの者にも影響を与えた。貧乏な時代でもあったから、独自の海外遠征はなかったが、カラコルム五大氷河踏査隊に加わった。また、ヒンズークシユ・カラコルム会議の事務局長や、日山協のK2遠征の委員を務めた人もいる。

アルムでスイスアルプスへの指向を助長された筆者は、昭和32年、アルバート先の文部省経由でベルン大学山岳会とのつながりをつけた。そしてその年、アルパインクラブ100年祭の帰りにグリーンデルワルトに立ち寄り、旧友との再会を果たした横有恒さんについて報じるスイスの主要紙『ブント』の記事を手にした。これを山岳雑誌で読んだ満彦氏に呼ばれ、アイ

ガーの東山稜登攀で横さんが受け継いだものについて話した。

満彦氏は、JAC会員になるための紹介者を佐藤久一郎さんと横さんとお願ひしたのでという。しかし、横さんでなく加藤泰安さんになったことを話していたが、昭和38年にアイガー北壁に登ろうとしたときの満彦氏の思いは、大正8年にアイガーの東山稜を狙った横さんの思いに近かったようにもみえる。その後、マッターホルン北壁登攀など満彦氏の山に対する思いは、ともに登攀した人や仲間、に伝わり、大学山岳部や社会人山岳会の活躍につながったともいえよう。アルムの和田礼子氏(JAC)にしても、数年前まで鹿島槍山麓の自分の山小屋に30年も独りで住んでいたということだ。

講師の話が一段落して質疑応答に入ったが、「我これよりAフェースに登らん」とある満彦氏のメモを屏風岩で見つけたことを、この岩壁の積雪期第3登を果たした、関西学院大山岳部OBの三沢氏が話していた。山岳史懇談会らしい場面であり印象に残った。

Climbing & Medicine · 47

雷の直撃と心肺蘇生

志賀尚子

つい先日、神奈川県藤沢市で公園を散歩していた女性2人が、落雷により亡くなりました。この事故は、山やゴルフ場ばかりでなく、ごく身近な場所でも雷の危険があることを警告し、あらためて雷の怖さを印象づけました。

雷に打たれた場合の死亡率は約30%であり、世界中で年間約1000人が雷によって死亡するといわれています。死亡のほとんどが直撃による即死で、電流が心臓を流れることによって起こる心室細動(重症不整脈、心筋が小刻みにケイレンする)や心静止(心筋の動きが停止してしまう)などの心停止が原因ですが、呼吸中枢の抑制による呼吸停止が原因のこともあります。

ここでぜひ覚えておきたいのは、雷による心停止患者は、他の外傷や疾患による心停止に比べて心肺蘇生法による救命率が高く、さらに後遺症なく社会復帰できる可能性も高いことです。

もしも一撃の雷で複数の負傷者が発生した場合、呼吸停止や心停止していない負傷者がその場で悪化する可能性は低く、むしろ回復する可能性が高いため、動いている人やうめき声を出している人の手当ては後回しにします。呼吸停止、心停止の人を最優先で助けな

ければなりません。すぐに心臓マッサージや人工呼吸を始めましょう。そして少なくとも30分は諦めずに続けて下さい。もし運良く心拍が再開したら、再び心停止となることは稀ですが、もちろん迅速に救援を依頼し、至急病院に搬送します。心臓は動いているのに呼吸は止まったまま、なかなか自発呼吸が戻らないこともあります。この場合も絶対に人工呼吸をやめてはいけません。なお、雷に打たれた人に触っても感電はしませんから、通常の感染予防を心がけるだけで十分です。

雷撃そのものによる心停止ではなく、雷に打たれた衝撃で転落・墜落し、その際の外傷によって呼吸停止や心停止状態に陥った場合、原因は出血性ショック、脳挫傷、頸髄損傷その他になります。残念ながら、こういう場合では救命の可能性はほとんどありません。重症外傷による負傷者が同時に多数いる場合には、呼吸停止や心停止した人の蘇生は断念せざるを得ないでしょう。受傷の原因によって、蘇生の対象を取捨選択しなければならないわけですから。

すべての基本として、山中で、特に事故の負傷者に心肺蘇生法を行う場合、第2の事故が起こらないよう、まず始めに現場周囲の安全を確認しておくことをお忘れなく。

なお、UIAA-Med Com(国際山岳連盟連合医療部会)が2003年に『雷の予防と現場処置に関するガイドライン』を出しており、No.708の「山」の医療コラムでも紹介しています。興味のある方は参照して下さい。ホームページからも御覧になれます。

100周年記念事業

会員募金並びに有志募金の御礼とご報告(4)

募金委員会

1. 大学募金について

6月号でご報告した15校に加え、左記の大学より募金をいただきました。大学名を掲載し、御礼とさせていただきます。

2. 企業募金について

4月末までにご協力いただいた企業名については、6月号に掲載させていただきました。5月以降に募金をお寄せいただいた企業名を掲載し、御礼とさせていただきます。

3. 有志募金および会員募金について

90名の方々より募金をお寄せいただきました。

〈大学募金〉(4校)

明治大学、中央大学、静岡大学、大阪市立大学(大阪市立大学並びに同志社大学は、関西支部の遠征に対しても別途ご芳志をいただきました。)

〈企業募金〉(19社)

(株)尾上機械、(株)大林組、(株)畔蒜工務店、(株)三谷商事、(株)

モルテン、(株)久米設計、日本ライ

ナー(株)、(株)ライスリー、(株)インテ

リジェンス、(株)しんとう計測、(株)

東海日動パトナーズ大江戸、(株)

フレッセイ、(株)学生援護会中部、

新菱冷熱工業(株)、(財)松原病院、

(株)フクイ感光社、(医)福井心のク

リニック、富士電機システムズ(株)

〔有志募金〕(敬称略、7月13日現在)

100万円以上(1名) 吉村健児

10万円以上(1名) 吉永英明

5万円以上(5名) 本片山数雄、

新妻徹、種村重明、藤井正善、梅

木秀徳

3万円以上(2名) 大野秀樹、百

瀬寿雄

1万円以上(13名) 錦織保清、小

林碧、山口俊輔、秦野一彦、長田

義則、小林智明、芳野越夫、芳野

菊子、向井裕彦、高塚武由、永田

弘太郎、大崎和子、花岡潤吉

〔会員募金〕(敬称略、会員番号順、

7月13日現在)

9千円(69名) 中尾正武、塩原國

100周年記念式典ニュース

10月15日(土)に100周年記念式典を開催

式典委員会では、厳粛かつ100年の歴史と伝統にふさわしいセレモニーを執り行うよう着々と準備を進めています。式典と同時に、展示会(「写真で見る100年の歴史」など)や記念講演会、記念祝賀会などを開催し、式典を盛り上げる予定です。また、レセプションホールではクラブライフを深める交歓会を用意します。

式典

日時: 10月15日15時30分からを予定
場所: 新高輪プリンスホテル「飛天」

祝賀晩餐会

日時: 記念式典終了後
場所: 新高輪プリンスホテル「飛天」
会費: 1万5000円(事前振込)

講演会

日時: 13時からを予定
場所: 新高輪プリンスホテル「飛鳥」
講演: 国内外の著名登山家に依頼中

展示会

日時: 12時ごろからを予定
場所: 新高輪プリンスホテル「うずしお」
展示: 「写真で見る100年の歴史」など

交歓会

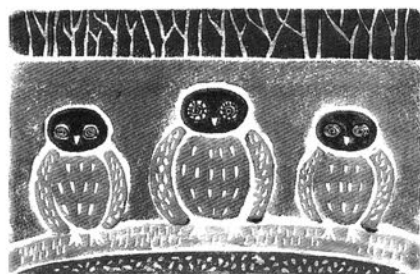
日時: 記念祝賀会終了後
場所: 新高輪プリンスホテル「さくら」

隆、中島文夫、高村奉樹、西川元夫、岩佐吉雄、小笹孝、白木貞次、山寺義雄、井上晃、尾崎祐一、高田健夫、井谷孝、雁部貞夫、松田久男、稲葉十四男、岡田勝英、許山隆、五百沢協子、石原俊洋、尾崎千代一、乾好、福楽勤、田川義久、大峰芳枝、渡辺広徳、大谷司、五百沢智也、阿部明義、霜田嘉一、福森利明、有元利通、柴山勝士、鳴原義昭、吉岡淳一、白井直器、高村利幸、吉川明秀、所一路、岩

井國臣、沼田敏明、若林和司、猪又敦子、西條好迪、秦和寿、若山暢子、横山征平、遠山元信、岡田清美、松田昭郎、田中昌二郎、三戸部清文、諏訪肇、横山哲、佐々木國雄、上野孝、林正一、井戸川三男、野口保光、山本久子、兼光功、大脇美代、檜山重幸、岡田育子、杉浦哲和、藤川美久子、熊谷美奈子、広瀬弘、晝間弘子

以上

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

『山の世界』

梅棹忠夫、山本紀夫・編



2004年7月刊
岩波書店刊
A5判 344頁
定価3150円

本書は雑誌『科学』の特集記事として「山の現在」という題材で掲載されたものを、全面的に加筆修正・執筆者の追加をして出版されたものである。最近の登山人口は急増しているが、その中心は中高年者であり、かつてのように若者が独占するスポーツではなく、つて久しい。そうしたことから現在の山として何が問われるのかをあらゆる方面からとりあげている。

約30余名の有名登山家による執筆集で、中高年登山の現況と行方(斎藤惇生)、エヴェレスト登頂から50年(江本嘉伸)など序章では「今山で何がおきているか」をテーマに論じられており、山の環境、山の暮らしと文化、山の危険と保護などを収録している。大衆化された現代登山の行為に対して、各方面から追求した書として一見の価値がある。特に「チベット・ヒマラヤが決める地球の気候」(安成哲三)や「水資源としての山」(中尾正義)など、山そのものより山を通しての環境問題を取り上げている部分や、「山岳文明を生んだア

ンドス農業とそのジレンマ」(山本紀夫)や「山間地域の集落と過疎化の問題」(藤田佳久)など現代の持つ問題を鋭く追求している。そして、なにが若者を山はなれにしているのかの疑問を明らかにすることが本書であり、山について多角的にのべた日本で最初の書であるとしている。そして登山をとおして生態学から民俗学へ、さらに比較文明学へと進んだ著者、また研究仲間も登山から野外科学の道にすすんだ後輩達、そうしたことから「山はなれ」が「科学は

なれ」につながるといふ危惧をもち、広く山への関心を深めることを喚起している書である。

(林 栄二)

中村保・著

『チベットのアルプス』



2005年3月
山と溪谷社刊
A5判 381頁
定価3360円

本書は『ヒマラヤの東』『深い浸食の国』に次ぐ三部作の完結編であり、グレート・ヒマラヤの東、中国・南西辺境踏査の記録ばかりでなく、著者がこれまで研究してきた、この地域に関する探検・民族・宗教・地勢等を集大成した貴重な書といえる。

東チベット・雲南・四川・青海の無数の知られざる山々に未踏査の領域を求め、還暦に近づいてから古希に至るまでの14年間・26回にわたり、行き着けるかどうかかわからない未知の辺境に足を踏み入れた著者のフロンティア・スピリットには全く頭が下がる。

文中「机上の計画はラサに到着

した日に早くも変わることになる。旅の途中でも次々と変更を余儀なくされる。が、「ヴェールに包まれている未踏の山々の写真を撮る」という命題だけでは頑なにこだわった……とあるが、全く同感で、私の4回のチベット旅行においても計画通りに行えたことは1回もなく、常に変更を強いられた。目的を絞り込み、困難を乗り越え強い意志でこれを買いたからこそ「日本山岳会第6回秩父宮記念山岳賞」の榮譽に輝いた由縁であると思われる。

また、どう猛なチベット犬に追いかけられたり、車が動かなくなったり、ガイド・運転手・馬方に行くのを渋られたり……ということが日常茶飯事の辺境で、ただ一人早朝暗いうちに起き、写真撮影に歩いて行く……まさに「パイオニア・ワーク」に命をかけた14年間であつたといえる。

天候劣悪な中国南西辺境でこれ程の素晴らしい写真の撮影に成功したのは間違いなく「晴れ男」であり、読み進むにつれ、著者の深い洞察力・分析力・地図判断力・語学力などに圧倒されるばかりである。

(田尻一寛)

報告

8月

Report

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です

医療委員会

第25回 日本登山医学 シンポジウム開催

5月21日(土)〜22日(日)に山本正嘉学会長(鹿屋体育大)の主催により、第25回日本登山医学シンポジウムが開かれた。

21日の午前中は一般演題13題が発表された。テーマは低酸素室におけるトレーニング、息こらえ実験、雪洞での体温変化、サポートタイツの効果、道迷いの調査などだった。前川剛輝氏は、低酸素室の動脈の酸素レベル(SpO_2)の低下は、低圧低酸素室と比較して少ないことを報告し、低酸素室では必ずしも設定高度と同じ環境が得られるわけではないことを示唆し、興味深かった。

午後からは、学会員の参加者60

名に加えて、主に九州一円から一般登山者40名も参加した。特別講演は、まず、近藤和美氏が50歳を過ぎてから8000m峰6座に無酸素登頂した経験を報告した。氏は酸素を使つてエヴェレストにも登頂し、また、多くの人を登頂成功に導いている。高所登山の成功の要諦は、高所順化をきちんとすることと、7000m峰を数多く登ることであると強調した。さらに、新井裕巳氏がスポーツクライミングの科学的なトレーニング法と指導法について講演した。実験に基づいた実践的な内容で説得力があった。

シンポジウム「登山医学研究会発足25周年―これまでの歩みと今後の課題―」は、中島道郎氏による25年間の回顧から始められた。

続いて、「どうすればよいのか―研究成果を一般登山者に還元する―」というテーマで、山本正嘉氏が転倒事故を防ぐためのトレーニング法を紹介した。1週間に3日、15回のスクワット5セットをするだけで著しい効果があるという、ありがたい話だった。野口は1月の医療委員会が行なったシンポジウム「突然死を考える」を紹介しながら、突然死の防ぎ方に重点をおいた講演をし、聴衆から活発な質問を受けた。大森薫雄氏は、スポーツ障害として若年クライマーの著しい手指変形の実例を示し、関係者に警鐘をならした。

最後に、登山者から研究会への要望として、牛島津氏が高所突然死例を提示しながらガイドライン作成を提唱した。また、浅野勝巳氏が富士山測候所を高所科学研究拠点として残すための活動の経過と展望を報告した。

さらに、夕食後に米澤弘夫氏が招待講演を行ない、鹿児島本土はもとより、屋久島の岩場を200本も開拓した成果を、詳細なデータと豊富な写真を使つて1時間余り話をし、聴衆をうならせた。近藤氏が、「すごい人がいるものだ」

と感心していた。

功労賞は日本登山医学会への貢献に対して大森薫雄氏(本会元副会長)と上田五雨氏に授与された。奨励賞は昨年、「24時間山岳耐久レースにおける生理的負担度と疲労に関する研究」を発表した許斐真由子氏に授与された。山岳レースを完走するためのガイドラインを作成したもので、実際に役立つ内容と思われた。

22日は、鹿屋体育大学のトレーニングセンター施設見学と、新井氏によるクライミング講習会が開かれた。残念ながら、小雨のために高隈山登山をする者はいなかったようだ。

鹿屋体育大学のプールの玄関には昨年アテネ五輪で金メダルをとった柴田亜衣選手の顕彰碑があり、鹿屋での熱狂ぶりが感じられた。今回は増山茂氏(本会元理事、東京)によって開催予定である。

今回の学会は充実した興味深いテーマが多く、一般登山者にも十分楽しめる内容であった。一般の方もすすんで本学会に出席したり、学会の会員になることをお勧めしたい。

(野口いづみ)

三水会

第8回韓国の山
内延山・八公山・仏国山

内延山(710m)は韓国慶尚北道の東海岸よりあり、12瀑布(滝)で有名な溪谷を持つ。今年は内延山をめざし、5月22日、釜山近郊の金海国際空港に到着。

日本人20名(韓国人の名の一行)はチャーターバスで京釜高速道路を古都慶州へ向かう。低山麓に林立するアパート群、松並に寄り添うような田植えの盛りであった。慶州では、新羅の都として千年



宝鏡寺の山門前で集合写真

栄えた国立慶州博物館と、世界遺産に登録されている仏国寺の石窟庵の石造阿弥陀仏を拝み、境内も観光した。

23日5時30分出發。7号線を北上し、浦項を経て、宝鏡寺へ行く。入山料を納めて登山口に入り、巨岩の溪流沿いに歩く。エゴノキの白い花がいたる所に咲き乱れている。10時頃、最初の瀑布に出合う。ここ6番目の連山瀑布は巨大な岩壁が行く手を遮り、頑丈で華麗な吊橋が設置されている。鑑賞用だろうか。この先、内延山頂への進入路マップが不正確で苦労したが、14時頃に山頂。下山路、日当たりの良い所に墳墓が点在していた。この土饅頭には歴史がある。下山後、美味なチヂミとビール、夕食は焼肉。

24日、早朝大邱方面に向かい、八公山道立公園へ。八公山(1193m)登山口の桐華寺手前にロープウェイがあったが、10時運行との事。静寂、玲瓏な参道歩きとなり、東峰には11時頃到着。途中急峻な沢登りもあったが、オオヤマレンゲの天女の白花に歓呼の声がある。当地では白は聖なる色である。下山後、絶品の冷麺とビ

ピンパで昼食。高速道路を走り、18時頃ソウル明洞のホテル着。25日、ソルロンタンで朝食。仏国山(468m)へ行く。地下鉄を東大門駅で乗換えて議政府北部駅へ。定期バスに乗り登山口には10時30分頃着く。白華庵で信者の礼拝を見学。主峰、第2峰をよじ登り、斜度60度の巨岩の鎖場を30mほど下降したりしてスリル満点であった。夕食は骨付きカルビと海鮮鍋で盛大な打ち上げとなった。

26日、夕刻の便で帰国した。

(石田稔郎)

日本全国4000山の情報を網羅!

日本山岳会創立百周年記念出版

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り
定価18,900円(税込)
(日本山岳会会員は特別割引あり、後日連絡いたします)

択捉・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。

日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあけて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科がついに完成! 10月下旬刊行予定。

予約受付中!

—推薦のことは—

日本山岳会二代会長高頭式氏による『日本山岳誌』から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。

日本山岳会
会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0096
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

携帯電話が使えない場所で、緊急時に備える
国内仕様の**イリジウム**衛星携帯電話が再開

販売価格 241,500円(消費税込)
●レンタルもございます

SpO2の変化をモニターして、高山病予防に役立てる
新型 **パルスオキシメーター Ubi-x 誕生**
メーカー希望小売価格 68,250円(消費税込)
●高所登山でも精度は実証済 ●体動の影響に強い

Wec

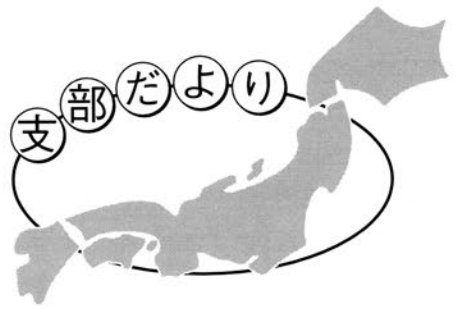
株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業 1662号
〒105-0003 東京都港区西新橋3-2-4-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 mail info@everest.co.jp

青森支部

白神山地ブナ林再生事業

日本山岳会創立100周年記念事業として、青森支部(根深誠支部長)主催「白神山地ブナ林再生事業」が、6月24・25日の2日間、世界自然遺産白神山地の櫛石山登山口で行われ、全国から駆けつけた会員約75名がブナ苗木約50本を植樹した。

24日午後、鱒ヶ沢町の一ツ森自然学校で受付後、樹齢300年という鱒ヶ沢杉(北限の天然杉)や、藩政時代の田山である「ミニ白神」を巡る自然観察会が行われ、極めて価値の高い自然生態系が白神に



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

保たれていることに参加者は驚いた様子だった。

午後6時からの開会式で、根深青森支部長が「ブナ林再生事業は世界遺産に指定されて以来の課題であったが、100周年記念事業として受け入れられた事は名誉」と、挨拶。

来賓の田邊壽副会長は「100年前に日本山岳会を創設した人々も、山が好きだ、大事だというのが自然保護をしてきた。この白神の地では、自然保護とひと味違うブナ林再生を目指しており、素晴らしいと感じている」と挨拶された。

長谷川鱒ヶ沢町長、中野津軽森林管理署長の祝辞の後、本事業のプロジェクトリーダーである村田孝嗣会員が、パワーポイントを駆使して、「私達の暮らしになぜ森が大切か、後世に残し伝えていくためにどのような努力がなされてきたか」等、ブナ林再生事業の経過報告をし、この事業に初めから携わってきた大森弘一郎会員が、試行錯誤した当初の苦労話を述べた。大塚博美元会長の乾杯で始まった懇親会は、郷土芸能の担ぎ太鼓が披露され、ねぶた囃しに会場が



植樹作業に汗を流す参加者

らハネトの飛び入りがあるなど、非常に盛り上がりを見せた。

翌25日は、今冬の豪雪で林道が通行不能となったため、迂回しながら3時間をかけて、1999年から継続実施している櫛石山登山口付近の植樹会場に約75名が集会した。

苗木は柏木農業高校の生徒達が白神山地で種を採取して育てた4年生30本と、大森会員が横浜で育てた3年生20本。元営林署職員である竹越恵蔵会員の植樹指導のあと、10班に分かれて杉の除伐跡地等に植樹し、野ウサギが嫌がるという杉の葉で苗木を囲んで守り、完了した。

移動時間が長かったため、例年参加している会員にとっては「作業が少なく、物足りなく感じた」という一面もあったが、名古屋から参加の妹尾幸雄会員は「ブナの植樹は生涯の思い出。また訪れてブナの成長を見てみたい」と、感激の様子。

自然の再生力を助けながら、杉の造林地を白神山地本来の自然にという青森支部の取り組みは、200周年に向けての一里塚になる事であろう。(大久保勉)

福井、石川、富山、京都、岐阜支部

南極の氷で乾杯!

100人が集い、盛大な記念式典

福井、石川、富山の北陸3県と京都、岐阜の5府県合同の「100周年記念式典と山行」が6月11・12日、福井市で開催された。

初日は、山岳雑誌に「日本百霊山」を連載している作家の立松和平さんが講演、230人が熱心に聞き入った。夕方から場所を移し、式典と祝賀会が開かれ、100人近い会員が賑やかに談笑するなど盛り上がりを見せた。

翌日は立松さんとともに福井の



立松和平氏、会長を囲んでの宴

霊峰、越知山を記念登山、支部同士で交流の輪を広げた。式典には、日本山岳会の平山善吉会長、平林克敏副会長らが福井入りした。

平山会長は、祝賀の挨拶の後、第1次から3次まで南極観測隊に参加した思い出を披露。有名な樺太犬のタローとジローの逸話や、いん石8500個を収集したこと、オーロラの発生メカニズムの解明に取り組んだ当時は振り返り、日本山岳会の足跡を語った。

した。福井県山岳連盟の関孝治会長もお祝いの挨拶に立ち、「私は平山会長の後輩(日本大出身)。私の時代はしごきもありました。今となってはいい思い出。今後とも一歩前進、会員の奮闘を願っています」と激励した。

続いて、祝賀の宴。平山会長の粋な計らいで、南極の水が運び込まれ、オンザロックで乾杯。氷からは「プチプチ」と気泡が弾けるような音がし、まさに南極の一端を感じることができ、場が盛りあがった。その後、来賓である関西支部長の重廣恒夫氏、東九州支部事務局長の西孝子氏や、主催府県の各支部長が支部紹介などのスピーチを行い、話が弾んだ。

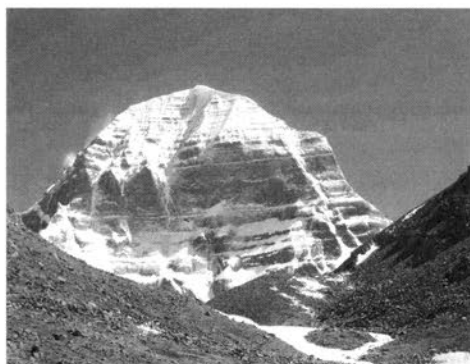
なお、今回の記念式典を主催した5府県支部の会員は590人。全国の支部会員2960人の約2割に当たる。

(永田康弘)

岐阜支部

100周年記念 聖山カイルス一周トレッキング

昨年の日本山岳会晩餐会において、名誉会員に推薦された高木碯



カイルス北面

男氏(83歳・前岐阜支部長)を隊長とするメンバー(隊員7名、ウェットトレック・貫田)で、聖山カイルスを一周(5月7日～6月2日)した。

今回の企画は、JAC100周年の節目でもあり、10年来温めていたシルクロードを中心とする旅の最後の仕上げにしようと思い定めていたものである。

5月7日に出国。ネパールのカトマンズから車で中国のチベット自治区に入る。四輪駆動車での道のりは全行程2500km、平均標高4500mでの滞在は22日間、平均年齢は71歳の超熟年と言われるメンバーである。

18日、高度に体を慣らしながら

カイルスの麓に着いたが、ドルマ峠は雪が多くヤクもポーターも越えられない。現地のガイドと交渉し、帰国に合わせた最終日程まで順延し、グゲ遺跡などの見学を先にした。

23日、カイルスの麓で行なうサケダワ祭(釈迦の生誕祭)を見学、その間吹雪に遭い、天候の心配をしたが、翌24日から快晴、2泊3日のコルラ(一周)に取りかかった。

第1日目、招待所のタルチェンを10時20分に発ちサケダワ祭のあ

ネパール・トレッキング・シーズン到来!

エベレスト・パノラマ・トレッキング 12日間

●10/12(火)発 ●10/26(火)発 ●11/9(火)発 ●12/14(火)発 320,000円

ロッジ滞在で楽しむランタン・ヘリ・ハイキング 10日間

●10/13(火)発 ●10/27(火)発 ●11/3(火)発 ●11/17(火)発 345,000円

アンナプルナ・ダウラギリ・パノラマ・トレッキング 9日間

●10/4(火)発 ●10/18(火)発 ●11/8(火)発 ●11/15(火)発 298,000円



国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 日本コンパニオン

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com



ドルマ峠 (5630m) にて全員の記念写真

った上部の車止めにてヤクグルー
プと待ち合わせ、15頭のヤクに食
料、テント等を載せ出発する。カ
イラスの北西側のなだらかな溪谷
を時計回りに約4時間の走行。標
高4920^{メートル}のデラプール・ゴン
パの近くでテント泊。快晴の中、
カイラスの北面で最も綺麗な山頂
が望めた。朝方はマイナス15度で
川の水が完全に凍っていた。

第2日目、最大の難所ドルマ峠
(5630^{メートル})を越える。この日も
快晴、空の青さと雪溪のコントラ
ストがサンガラスに浸みこむ。峠
の取付から固い雪溪(ヤクが乗っ
ても無難)で意外と足場は楽であ
るが、さすがに高所ではビスター

リの行動。ヤクの背を借りた者も
いたが頑張つて登った。峠では、
このメンバーでよくここまで来た
とみんな涙を流して喜び、手を握
りあった。ここからの下りは岩場
の急下降、800^{メートル}程下った川原
でテント泊。やはり翌朝はマイナ
ス10度で寒い。

第3日目、右岸のヤク道を下る。
岩場を巻くが、川は一部凍結した
難所もあった。ゴンパ(古い寺)
の前にある小さな茶店で、持参し
た昼食をとる。途中、五体投地の
女性2人組みを追い越す。精神的
にもコルラした安堵感があり、皆
和やかに下山する。

谷の最後は切りたつた溪谷を見
ながらの下りで、そこを抜けると
突然平原となり、迎えの車が待つ
ていた。

コルラの全行程52^{キロ}のうち10^{キロ}
は車での移動であったが、残りは
元気にほば歩き通した。

5月26日、マナサロワール湖の
畔にあるホルチュの招待所で、5
月9日以来の禁酒令が解禁になり、
日本から持参した日本酒でコルラ
成功を祝った。

(中島眞一)

東 西 南 北



オオヒラウスユキソウ

イラスト・倉岡啓吉

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、
短歌、詩などを掲載するページです。
どしどしご投稿ください。(紙面に限り
がありますので、1点につき1000字程
度をお願いします)

2本のピッケル

宮澤美渚子

故織内信彦名誉会員の代表著書
『偃松帯』に、福田源五郎氏の追
悼文がある。福田氏はJACの会
員ではないが同志社大OBであつ
た。学生登山界では先鋭的クライ
マーとして活躍したが、1937
年吊尾根から岳沢へ転落死した。
彼は、山内特注のプレート部分が
平たい珍しいピッケルを所有して
いた。遺品となったそのピッケル
を、ご遺族が織内名誉会員に託さ
れた。若くして逝つた彼の死を認
めたくなかつたお気持ちもあり、
大切に50年来保管・徳蔵されてい
たが、山内特製の名品である事か

らJACに寄贈された(会報50
2号)。

2002年、織内名誉会員が病
気で再入院をされたとき「源五郎
のピッケルはどこにあるだろう」
と漏らされた。資料委員会に問い
合わせて、他の資料とともに保管
されている事を確認、写真を撮つ
て報告したところ「あれは貴重な
ものだから、博物館へ置いたほう
がいい。出来れば大町山岳博物館
へ寄託して欲しい」と言い残され
て、わずか1か月足らずの9月に
亡くなられた。

織内名誉会員のピッケルもまた
山内の特別作品であつた。192
5年、横有恒元会長がアルパター
峰に初登頂した時に残されたもの
を模して作り、オパーリン氏等か
ら寄贈されたのと同じ形のプレ
ートを記念に注文されたもので、山

内の技術を見る作品である。(『山岳』45、1950年掲載)。そのピッケルも、ご遺族により04年8月26日、当会へ寄贈されている(会報713号)。

昨年、この2本のピッケルは故人の遺志を受け、揃って大町山岳博物館に寄託された。

この2本のピッケルとともに二人は、六十数年ぶりの北アルプス山麓で、ゆつたりと山談議にふけていると思っている。

「内匠ノ景」の珍現象

東九州支部 飯田勝之

かつて「天下無双の絶景」であると頼山陽が激賞した耶馬溪は、奇岩、奇峰をはじめとする数々の秀景が広大な地域に散らばる景勝の地で、その中の66カ所の景勝指定地が集まって文化財の「名勝耶馬溪」として指定されている。

中央分水嶺はそんな耶馬溪の中央分水嶺にうねりながら走っているが、「内匠ノ景」もその通過地点の1つである。

「内匠ノ景」は上下2つの人工池

とその周りの景色が優れていることから指定された所である。分水嶺はこの景勝地を半円形に取り囲みながら通過しているのであるが、珍しいことに、そこには流域変更をともしなう工作物が造られているのである。

それは上下に2つある下の池の越流堤で、この部分は地図で事前調査する段階でも、分水嶺を暫定するうえでも、読みにくくて議論になった所でもある。

踏査隊は6月のある日、この地点の前後を踏査した。上の池の堤防を横切って対岸の稜線に取付き、目標とする到達点に向かって南下を始めたのである。

標高530mほどの稜線から急に高度を下けている所を、低木のブッシュを分けながら、がむしやりに急斜面を下っていると、突然ヤブの中にコンクリートの堤防が現れた。長さ20mほどの堤防で、よく見るとそれは下の池の越流堤(余水吐き)となっているのである。

そこは、通常は地形通り中央分水嶺の上である。しかし、雨量が多い時や、非灌漑時などで池の水位が上がればこの堤を越す水量になると、珍現象が起こる。通常は筑

後川に流れて東シナ海に注ぐべき水が、駅館川に流れて瀬戸内海に注ぐのだ。つまり、その時には中央分水嶺は約1km南の稜線に移ることになる。

地図から分水嶺であることは判読できたが、ここに人工堤があることまでは読めなかった。

これは、中央分水嶺の中ではごく稀と思われる流域変更をともしなう人工工作物である。分水嶺踏査の中における珍しい発見なので報告しておく。

久しぶりの白山

山の自然学研究会 大船武彦

7月14日〜15日、梅雨明けまじかの白山はお花畑であった。観光コースを辿って室堂へ向かったが、突然、目の前に現れたササユリや、シャジン仲間……、次から次へと美しい花々、百花繚乱である。

「花の白山」には、小ぶりのオーレンやツマトリソウが、キスゲやトラノオの隙間という隙間に所狭しと咲いている。コザクラやフウロなど、白山を冠する花々は、他

のどの山で見るよりも、美しく際立っているように感じられた。しかし、以前からみると花が少なくなっているという。

帰途、辿った展望歩道は、白山から北アルプスが眺められると、案内役である石川支部の埴埴滋さんのお勧めのコースである。

歩道は、かなり整備されており、歩きやすい登山道となっていた。歴史ある白山には整備のノウハウも蓄積されているのだろう。

一方、別当谷と柳谷の出会い付近で延々と続く治山砂防工事は、何とかならないものだろうか。崩れる谷を、なぜ抑え込まなければならぬのだろうか。崩落するという自然の動きは抑えるのではなく、崩落を保護・管理したらどうか。地元の治山の方々の、崩落から自然を保全するのだという考えは間違っていないだろうか。

花の白山は、今でも自然保護の白山のように思えた。仲間と一緒に、来年また人を誘って白山を訪ねることにした。これからも美しい花々や、アルプスの眺望、そして白山の自然保護を楽しみ、そしてイロイロと悩んでみようと思っている。

会務報告

6月理事会

日時 6月8日18時30～20時40分
場所 日本山岳会会議室

「出席者」平山会長、平林、橋本、田邊各副会長、賛田、吉永各常務理事、石田、篠崎、大蔵、野口、斉藤、藤井、渡辺、石橋、古野各理事、山本監事、重廣、今村各常任評議員

「委任」一力監事、小倉(董)常任評議員

●議事に先立ち、平山会長より調整中であった常任評議員1名の人選について、今村評議員が互選された旨の報告がなされた。

【審議事項】

1 組織改革(案)について

別添資料により検討、支部との関連を明確にして7月理事会で決定することとした。(継続)

2 平成17年度収支予算の総会資料訂正について

総会資料の一部に誤記があったため訂正した。(承認)

3 定款第16条第2項に基づく「会長職務代行者順序」について

平林、橋本、田邊各副会長の順序とすることとなった。

4 100周年記念事業関連

①式典委員会・式典内容について別添資料により神崎総合式典委員が説明。特に式典への外国関係者招待・案内先について関係者より幅広く意見を聞き対応して欲しいとの要望があり、今後式典委員会において成案を得次第、逐一理事会に報告することとなった。

(継続)

②学生部・日中韓学生交流登山計画(案)について

別添資料により検討。本年9月中旬、日中韓学生交流登山を日本で実施し、東京でシンポジウム開催予定。(承認)

③ブロック別式典役員等派遣について

会長を主として各ブロックに最大2名以内を派遣することとなった。(承認)

5 マナスル初登頂50周年記念行事について

審議の前に大蔵理事より先般の事業委員会・マナスル登山―2005年隊の報告があり、併せて50周年記念行事に対する在ネ日本大使館、ネパール山岳協会側の対応

について説明があった。田邊副会長を担当として実行委員会を組織して対応することとなった。

(承認)

6 ネパール皇太子来日歓迎会協賛について

名古屋万博を機に来日されるネパール皇太子殿下の歓迎会(7月下旬・日本ネパール協会主催)に協賛として協力することとなった。

(承認)

7 各委員会構成について

各委員会を早期に立ち上げるため、早急に委員長・委員の選任をお願いする通知を発送することとした。なお、検討中であった会長直轄の資料映像担当は羽田栄治会員となった。(承認)

8 後援等

①名儀後援願↓山梨支部第6回雷鳥会議(8月20～21日)

②後援願↓日本ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト

国際交流青少年環境体験登山(8月23～29日 富士山)

③「山岳」転載許可願↓二階堂匡一郎会員(3974)

『吾妻山回想譜』追録出版のため、『山岳』第24年第3号P1～7の転載。

④写真借用及び原稿依頼↓長野市一草舎

『目で見る北アルプスの100年』(仮題)発行のため。

(以上4件承認、但し一部有償)

9 その他

①8月理事会について

例年8月理事会は開催されないが、本年は100周年記念事業実行中のため、開催することとした。(承認)

②会員減少対策について

山本監事より、昨今、会員の減少傾向が顕著となっているため、会費、終身会費のあり方等について検討すべきであるとの指摘がなされた。今後、理事会において検討する。(承認)

【報告事項】

1 信濃支部 ウェストン祭(6月4～5日) (平山会長)

2 東北ブロック式典(5月28～29日) (平林副会長)

3 五百城文哉展(7月16～8月28日) (平林副会長)

4 環境大臣に対する早池峰山の自然保護に関する要望書提出について (篠崎理事)

5 登山医学シンポジウム(5月20日、鹿屋市) (野口理事)

ルーム日誌 6月

6 平成17年5月の入・退会者
入会22名、物故4名、退会28名
7 事務局勤務体制について
7月より深田氏週3日、吉田氏(パ
ート)週3日となる。 以上

1日 臨時理事会 山岳地理クラ
ブ
2日 フォトビデオクラブ
6日 総務委員会
7日 図書委員会
8日 理事会 山想クラブ
9日 会報編集委員会 アルパイ
ンスケッチクラブ 山の
自然学研究会
10日 事業委員会
13日 アルパインスキークラブ
JAC01会
14日 事業委員会 二火会 休山
会
15日 三水会
16日 科学委員会 青年部 10
0周年募金事務局会議
アルパインスケッチクラブ
会報編集委員会
17日 資料映像委員会 アルパイ
ンスキークラブ
20日 山研委員会 インターネッ

ト小委員会 00会 九五

22日 100周年式典委員会 ゆ

きわり会 山想倶楽部

03同期会

23日 自然保護委員会 100周

年行事委員会 山遊会

24日 フォトビデオクラブ

27日 100周年募金事務局会議

30日 山岳編集委員会

6月来室者 588名

■会員異動(6月)

物故

河西彌一 (4205) 05・6・5

退会

松尾良久 (5816)

阿部公義 (8930) 関西

鶴田 稔 (10770)

長谷川利貞 (12266) 山形

廣本宣郎 (12553) 関西

大下敏彦 (13107) 福井

宮脇幸子 (13814) 宮崎

阿南志武喜 (13823) 熊本

石川光宏 (13895)

終身会員

柴田篤志 (4932)

成川隆頭 (5839)

小田島政行 (5852)

伊藤行人 (7733)

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーや
エクスペディションのアレンジまで。充実
度が違う「旅」のプランニングをこころがけ
ています。山旅などあらゆるジャンルを取り
扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 **アトラストレック**
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

スイスベルナーアルプスの岩場



スイス山岳会ベルン支部編

岡澤祐吉・他訳('72年版初日本語訳)

B6判上製本250頁 ¥1800 送料別¥340

ゲミからペーターズ山稜まで、ペーターズ山稜からフィンス
テルアルヨッホまで等全山稜山群の詳細な案内。付記、案
内人・運搬人規則、遭難信号等。(昭和49年出版在庫新本)

・日本図書館協会選定図書・今西錦司(故人)、

横川文雄(故人)、芳野満彦各氏推薦

取扱店 (株)アイダム 樹と匠社 上尾市富士見1-17-1
〒362-0041 TEL・048-779-5050 FAX・048-779-5051

郵便振替口座 樹と匠社 00180-6-7977

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆100周年記念「所蔵山岳図書・絵画展」

(主催) 日本山岳会

(協賛) 丸善(株)、丸善・丸の内

本店開設1周年記念

会期 10月8日(土)～17日(月)

午前9時～午後9時(最終

日は午後4時閉場)

会場 丸善・丸の内本店4階ギャラリー

展示 日本山岳会の所蔵する和書

1万1000余冊、洋書3

700余冊の内より厳選

した和書約100冊、洋書

(添付する訳書を含む)約

100冊と絵画15点の展

示。和書は原則として戦前

までのものと、本会のマナ

スルおよびエヴェレスト

登頂に関するもの。洋書は

原則としてエヴェレスト

登頂までのものと、8000
0メートル初登頂記。

◆ビールパーティー開催

総務委員会

恒例の首都圏会員懇親会(ビールパーティー)を開催します。楽しいひとときを過ごしましょう。

飲み放題。持ち込み大歓迎です。

日時 9月7日(水)18時30分～20時

30分

場所 日本山岳会ルーム

会費 2000円

申込 準備の都合上、8月29日ま

でに事務局まで(☎03-

3261-4433 FAX0

3-3261-4441

✉jac-sounu@jac.or.jp)

◆講演会のお知らせ

資料映像委員会

「語り継ぐ黎明期の登山……それ

ぞれの山」第5回講演会を左記の

ように開催予定です。

日時 11月3日(木)午後2時20分～

4時30分(東京体育館会議

室)

講演者 松丸秀夫名誉会員

テーマ 「山日記から見えてくる

日本山岳会

*講演と山日記の展示など。

*詳細は9月号に掲載します。

◆分水嶺踏査記念山行

「本州最低標高の分水嶺」

関西支部

期日 10月9日(日)

集合 JR福知山線 石生駅

午前10時頃

*10月初めの時刻改正に注意。

コース 石生駅→観音堂→岩座→

四の山→向山→清水山

分岐→分水嶺記念館→

石生駅

定員 30名(先着順)

申込 9月9日までに、住所、氏

名、年齢、会員番号、加入

山岳保険、連絡先電話番号

を明記し、関西支部事務所

宛(〒537-0014 大阪市東成区

大今里2-5-12 大阪セ

ルロイド会館内205号

室 ☎06-6971-18

067

✉jac-ks@m4.kcn.ne.jp)

◆山岳画家・茨木猪之吉を語る

緑爽会

日本山岳会章創期メンバーとし

て数多くの山の絵を描くと共に、

「山岳」や小島烏水らの著書に軽妙

な挿絵を遺した茨木猪之吉。彼は

また昭和17年、上高地のウエスト

ンのレリーフをはずして東京へ持

ち帰った一人であり、19年10月穂

高岳白出沢で忽然と消息を絶った

ことでも知られています。猪之吉

ゆかりの方々から、彼の画業と人

間像、親交のあった岳人たちに

ついて話していただきます。関心の

ある方はどなたでもどうぞ。

日時 9月29日(木)午後2時～4時

場所 日本山岳会会議室

会費 500円または1000円

(画集付)

司会 近藤信行(作家)

ゲスト 茨木岳人(猪之吉長男)

横山駒子(同 次女)

三浦 優(茨木家友人)

犬塚幸士(研究者)

*終了後、猪之吉が滞在した甲府

大沢酒造の「太冠」で献杯予定。

申込 ハガキかFAXで近藤緑ま

で(〒167-0042 杉並区西荻北

2-10-22 ☎502 ☎03

-3395-0326)

◆「山に魅せられた画家達」モン

ベルクラブ巡回展

日本山岳協会

山を愛し、山に魅せられ、自然

の詩情を画布に託し描き続けてい

る日本山岳画協会の会員、有志12

名による作品約50点の展示。

■諏訪展

創立100周年祝賀晩餐会 懇親山行(景信山)のご案内 事業委員会

祝賀晩餐会翌日の「懇親山行」は、景信山に登ります。景信山(727m)は3等三角点の山で、奥多摩、丹沢、道志の山並みや富士山の展望を堪能できます。山頂での記念撮影後は、創立100周年を記念して、高尾の森をご案内いたします。高尾の森では、自然保護委員会が中心となり汗を流して行う実践的作業のもと、5年間にわたり植樹活動が続けております。高尾の森ベースでは、スタッフ手作りの熱いトン汁にご期待下さい。

日 時	10月16日(日)
集 合	J R高尾駅北口 午前8時20分
解 散	高尾の森ベース 13時頃を予定
受 付	祝賀晩餐会会場
会 費	1000円(記念写真、通信費等)

*祝賀晩餐会会場の受付横で案内書を配布します。
(自然保護委員会協賛)

会期 9月3日(土)〜25日(日)
10時〜21時
会場 モンベルクラブ諏訪店
(諏訪市沖田町5-10 諏訪ステーションパーク内)
0266-71-1157
7)

リーモール店(町田市鶴間3-4-1 グランベリモール内) 042-788-3535
*問合 堀越昇(049-262-0855)
◆「新土曜会」会員募集 代表 箕岡三穂
「赤シャツ土曜会」は会名を「新土曜会」と改称し、サロンの活動ばかりでなく、登山の実施、研

究会などを行います。年会費は1000円。新体制による会の再発足を機会に新規会員を募集。
問合 丸山修一(03-5212-7036)
②doyoukai@mid.co.jp
◆前川滋写真展「神々の座」
世界の8000峰全14座と、その近くの山の写真。
会期 9月14日(水)〜25日(日)
時間 9時〜17時(20日は休館)
場所 安城市ギャラリー展示室A、B(名鉄西尾線、南安城駅より徒歩10分) 056-677-6853
◆編集後記◆
●前編集長の今村千秋氏から『山の編集を引き継ぐことになりました。100年の伝統ある日本山岳会の会報担当となれば、大きな不安と戸惑いではないです。とくに会報の役割とはなにかと考えてしまいます。
●日本山岳会の行事には、これまでいつも外から傍観していたような感じがした。長い歴史があるだけに、敷居が高かったのかも知れません。会報の編集担当になったのを機会に、日本山岳会の歴史や山岳界がかかえる問題も学んでい

ければと思います。

●この秋に100年を迎える日本山岳会です。当時から連綿と続く素晴らしい伝統があると思います。それは登山を、単なる行為としてではなく「文化」として育んできた先輩方の力ではないでしょうか。そうした彼らの熱い想いを継承するために、今月は巻頭で、作家の近藤信行氏に山岳会創立のころの人物像を綴っていただきました。
●次号からも、焦らずに少しずつ進んでいければと思います。これまで同様、全国の皆さんからの投稿が会報の基礎を作るのは間違いありません。引き続き原稿、イラストなどの投稿をお待ちしています。全国の会員の皆さんに、楽しみに待たれるような会報作りができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 723号

2005年(平成17年)8月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社